

昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成17年9月5日発行(毎月5日1回発行)  
第45巻9月号(通巻554号)

# 風土



9

1452

麦藁帽子  
神蔵器

月赤し一語<sup>かた</sup>らひの鵜の籠に

註 一語らひは番

七月の油滴天目茶盃かな

盆の来る石の割れ目の草引けば

父が来て母来て夜の明易し

背丈のみ兄に勝れり白緋

御輿洗ひの雨となりけり心太  
金魚玉みなとみらいの動き初む  
われも寄る芭蕉の椎の夏木立  
目に効くてふ小町の泉ほととぎす  
浴衣にも身八口あり桜桃忌  
行く夏の怒涛を前に裸かな  
欲しきもの茂吉の麦藁帽子かな



# 竹間集

同人作品



楊梅 浜 明史

楊梅や潮灼しるき若狭びと  
沖に立つ積乱雲や河豚釣つて  
船釣の河豚は外道よ雲の峰  
浜灼けて五目の跳ねる地曳網  
何を嘯む音や髪切虫の夜  
寒村の牛冷やされてゐたりけり  
今日<sup>六月二十六日</sup>は鬼平忌太秦映画村

桑の実や 浜 福恵

桑の実や老いて姉妹の睦まじく  
天滝の落つる里なり師の在ます  
鮎どきを野にある人の寡黙なる  
枇杷熟るる左近の眠る海の丘  
赤腹や薬師の森の貰ひ水  
不惑てふ男盛りの白緋  
七月を赤着て似合ふ少年期

昼寝覚 蓮尾あきら

青梅雨をがばりと鯉の返りけり  
海猫鳴くや砂丘にうすく下駄のあと  
茅花流し一枚の絵のはじめかな  
帰り来て朝より妻の草むしり  
海霧の夜の根室に船のビール干す  
交番に巡查もの書く薄暑かな  
裏山の木々混みてくる昼寝覚

往古来今

昭和二十三年夏のわが二十歳の青春を今に甦らせて

浜 明史

提 げ 戻 る 番ほまち 茶ち の 一 尾 金 目 鯛  
磯 の 間 を 日 の 揺 れ 磯 巾 着 の 花  
遠 雷 や む ら さ き を 吐 く あ め ふ ら し  
海 牛 の 歩 み は 潮 に 酔 ふ ご と く  
素 上 り の 鱈 や 鴨 の 引 き し あ と  
柿 蘭 や 峠 七 分 に 息 を 継 ぐ  
常とこぶし 節 を 噛 み 初 任 地 の 磯 恋 へ り  
常 節 を 噛 め ば た だ よ ふ 潮 の 香  
網 染 む る 大 釜 め ぐ る 裸 か な  
揺 蕩 ふ は 舳へく 倉ら の 舟 ぞ 磯 嘆 き

ほまち

漢字で帆待とか外持と書きますが、意味は「役得」とかへそくりのことです。

私の町の漁師は時化で不漁の際の自分の食扶持を番茶と言います。だから私は番茶に（ほまち）とルビを打っているのです。

海女笛や若狭の沖に舳倉舟  
赤銅にたうさぎ白き舳倉海女  
海女舟を遠くに鷗らの宴  
麦背負ふ裸や禾のぎに攻められつ  
麦刈りのあとの裸に磯の風  
秋となる手業の一つ船洗ふ  
五十い十さ集ば賑ははふ網元の懐手  
小こ女う子なのこ鯤ひしこを焙る囲炉裏端  
鯤焙る飽の殻や紙詰めて  
大敷網を揚ぐ船縁のはまち舳釣り

# 山河集

同人作品



神蔵器選

西御門二丁目通り額の花  
短夜や指差確認の電車発つ  
糶台にぶつかく真水大南風  
直線に榎の並木の梅雨入かな  
交番に拾はれてゐる羽抜鶏

平田紀美子

山盧

音発たぬ生活や竹は皮を脱ぐ  
村墓に蛇口一つや閑古鳥  
離山房の白花ほたるぶくろかな  
明易し乱れず刻む心電図  
張り替ふる四本の弦や沙羅の雨

林 裕子

「八九間」芭蕉の句碑や風薫る  
日光街道植田の村へ直進す

舘 泰生

桐の花自然歩道は右に入る  
借景は江の島なりき卵波立つ  
街道や「塩釜」頬張る麦の秋

米園ナショナルギャラリー 四句

杉本薬王子

ゼザン又の自画像を見る汗ばみて  
模写の椅子絵具も着いて涼しかり  
夏に死すゴツホの自画像濃き青き  
向日葵やゴーギャンは嫌ひゴツホ好き  
滂沱たる汗を供へん父母の墓

スリランカの旅

山本浪子

薬湯は寺の秘伝や暑氣中り  
紅茶注ぐ銀の腕輪や朝曇  
印度洋へ向く大砲や大南風

# 風土独語 / 神蔵 器



羅や墨彩画家の鎌倉展

平田紀美子

墨彩画は白と黒の世界だけで描く伝統的な水墨画の世界に、親しみと愛情、輝きをプラスした色彩が加えられたものである。紫陽花や露草のみどりに花の青紫色、椿や芙蓉などの華麗な花の紅色等、色彩を加えることによって花の美しさ、花の生命を描き出す。

鎌倉在住の閨秀画家たちの墨彩画展が開かれているようである。羅はほとんど濃い目をしているので、暑さの盛りに、うす衣から透く下着の白さが涼感を呼ぶ。そして蝉の翅のような薄くて軽いうすぎぬはきつちり帯を締めることによって女性の姿態を意識させ、女人の美しさをきわだたせる。まして墨彩画は、水墨画の要所要所に花の持つ魅力をさらに優雅に変身させる。うすもの鎌倉夫人は、ただ羅のひとつといったイメージより少し若く、華やいて匂うようである。

なお、これは掲出句とは別の話だが、私は墨彩画が水墨画に勝るなどとは思っていない。墨彩画のよさもよく解るけれど水墨画からすれば邪道ではないか。

音発ため生活や竹の皮を脱ぐ

林 裕子

「山廬」の前書きがある。この前書きがあれば、あとに何の説明もいらぬであろう。私などは龍太先生の静かなご日常の崇高な時間を思うばかりである。後山の竹が意外と大きな音を立てて皮を脱いだ。

「八九間」芭蕉の句碑や風薫る

館 泰生

この句碑は

八九間空で雨降る柳かな

である。「続猿蓑」に収められている元禄四年の作である。陶淵明の「田園居に帰る」

方宅十余畝 草屋八九間

榆柳蔭<sup>イオシ</sup>後簷<sup>ウラ</sup> 桃李羅<sup>メグル</sup>堂前

の詩句に因つたものである。句の八九間は、現代の私たちが使っているのと同じ意である。「続猿蓑」では、「八九間」の句が四吟歌仙の発句で、沾圃がこれに対し、「春のからすの畠ほる声」と脇を付けている。

なお、芭蕉の作風は大きく四期に分けることができる。第一期は初期の談林時代、第二期は談林からの脱出、漢詩に因つた時代、芭蕉野分して盃に雨を聞く夜哉

夏馬遅行我を繪にみる心かな

等、第三期が正風開眼、第四期は「軽み」の提唱。「八九間」の句が元禄四年に作られているのは珍しく、芭蕉は陶淵明に心酔し、時に「田園居に帰る」は愛誦していたようである。



滂沱たる汗を供へむ父母の墓

杉本薬王子

本来、これはいい句です、とか何となく惹かれて採りましたなどというのは批評ではない。特に選者としては、壇上にのぼり自分の選んだ句について批評ができないようでは選者は失格だと思ふ。しかし実際はその句についてなまじ批評したり解釈をしたりすると、かえってその句の持ち味・真価をそこねてしまう場合だつてあるだろう。「滂沱たる汗」は亡き二両親に対する子として何にも勝るものである。本号白眉の句である。

厨より一語 籐椅子より一語

豎山 道助

この句は新百合丘句会に出された。作者は「風土」に入会して半歳ぐらい、まだ日の浅い人であつたから驚いてしまった。

夕食後のかたづけのものでもしていたのであるうか。奥さんが厨から何か一と言ふ主人に声を掛けた。籐椅子にくつろいでいたご主人の方も返事はただ一言である。如何にも素っ気ないようだが、夫婦の会話はこれで十分というよりも、それが夫婦というものであらう。簡潔で、打てはひびく快さ。本当の幸せが見える。

なお虚子の『六百五十句』の昭和二十五年十月二十八日作に、「彼一語我一語秋深みかも」がある。虚子の場合、日本はまだ戦後の一億耐乏時代、作者と友人との会話である。表現形式が似たことは残念だが、友人との会話と夫婦の会話、それも直接妻とも夫とも言わず人物のそれぞれ居る場所によつては、おのずから微妙な差が出ている。

万緑や円覚寺より美男僧

志村 秀子

北鎌倉はかつて禅宗に帰依した北条氏の所領であつた。そのため鎌倉五山と呼ばれる禅宗の寺、建長寺（第一位）、円覚寺（第二位）、寿福寺（第三位）、浄智寺（第四位）、浄妙寺（第五位）のうち建長寺、円覚寺、浄智寺の三つが北鎌倉にある。

「ある秋の夕べ、境内を歩き乍ら、ふと正統院の門から僧堂の方を覗きこむと、一人の若い僧が道場の玄関の敷台の前の土間に身を投げ出し、まんじゅう笠を前に身じろぎ一つせずに、何時までもうつくまっていた。許されて招き入れられる迄は、何時間も何日もこのようにしているであらうかと、禅修業のきびしさに心洗われる思いがしたことである」（浄明寺太郎著より）

夏目漱石が若い頃心の悩みに参禅したのもこの寺であつた。今は古びた草堂は新しい建物になつているが、堂の左手前に

佛性は白き桔梗にこそあらめ

漱石

の句が自然石に刻まれておかれている。

円覚寺は禅宗の支配するきびしい世界への入口であり、吾人にとつてもなつかしい。「円覚寺より美男僧」は女ならずとも妖しきまでの美しさに胸がときめく。

手みやげに駅弁卯の花腐しかな

保田英太郎

この句の手土産の駅弁は、奥様へのもものではなからうか。桂郎に「駅弁の何故かたのしき遠雪崩」があるが、作者は留守居の奥様に駅弁を食べてもらつて旅の楽しさを共にしている。卯の花腐しもまんざらではない。

# 風土集



# 神蔵 器選

厨より一語籐椅子より一語 川崎 豎山 道助

死ぬることほんとは恐し著莪の花

土産屋に妻見失ふ夏燕

七十のデルデスデムデン麦の秋

石柱の罅に尿する夏の犬

梅漬けて午後は港区六本木

籐寝椅子己が形に窪みをり

梅雨冷やガスの炎の青揃ふ

パンで巻くフルーツサラダ雷兆す

梅雨冷や己れを透かすレントゲン

万緑や円覚寺より美男僧

蜘蛛の囀の人の入りゆく白心庵

我孫子宿脇本陣跡落し文

青梅雨や「田園の憂鬱」碑の立つ

葭切の鳴くや白樺文学館

川崎

豎山 道助

横浜

中村 洋子

川崎

志村 秀子

衣更へて母が小さくなりけり 平塚 中沢 三省

白玉や銀座にユトリ口喫茶店

泉への道下りゆく吉野建

てんと虫ラベルの多き旅鞆

海へ向く師弟の句碑や卵波寄す

夏雲や印刷局に人動く

三つ建つ博物館や麦の秋

泰山木妹背の山に香を放ち

夏蝶や万葉園に刻流れ

止め石の縄のゆるみし著莪の花

手みやげは駄弁卵の花腐しかな

どくだみに鳥居の脚の埋まりけり

更衣して回覧板渡しけり

置時計の文字盤光り梅雨に入る

梅雨晴のデパート地下を巡りけり

平塚

中沢 三省

川崎

井上 あい

横浜

保田 英太郎